

[研究報告]

幼児期からの負感情経験項目の抽出

角和麻衣子*・高平小百合**

要 約

幼児期からの虐待などの負感情経験は心の発達に大きな影響があることが報告されている。本研究は、家庭や学校など様々な人的環境の中で子どもが青年期になるまでに経験する具体的かつ一般的な負感情経験項目を抽出することを目的とした。大学生に半構造化面接を行い、負感情経験を思い出してもらう方法を探ったが、幼児期の記憶の曖昧さを補うため、幼稚園教諭に面接を行い、幼児期にみられる一般的な負感情経験を収集した。面接で得た発話データをKJ法とM-GTA法の一部を応用して分類し、幼児期からの一般的な負感情経験項目を抽出した。その結果、青年期までに、家庭で経験する負感情経験としては「両親がよく口喧嘩をしていて嫌な思いをした」などが抽出され、友人関係においては「いじめられて辛い思いをした」、教師との関係においては「自分の目標や価値観が教師と合わず不満だった」、クラスや課外での活動においては「クラスの活動で失敗をし、とても恥ずかしい思いをした」などが抽出された。幼児期の負感情経験項目として「母親（父親）のしつけが厳しくて嫌な思いをした」「母親（父親）に自分をほったらかしにされ寂しい思いをした」などが抽出された。

キーワード：負の感情経験、マルトリートメント、いじめ、幼稚園児、大学生

1. 問題と目的

近年、育児放棄などの虐待が増加し社会問題となっている。令和3年度の児童相談所における児童虐待相談への対応件数は過去最多となった（厚生労働省, 2022）。また、小児期（乳幼児期から思春期頃のこと、以下略）における虐待を含めたマルトリートメントの経験が、青年期以降の感情の制御不全や社会的不適応などの悪影響をもたらすことを示唆する報告も数多くある（Tomoda, et al., 2011）。

Tomodaら（2011）は、小児期に暴言虐待を受けることで、脳の構造機能に変容し、社会性の発達障害を引き起こす可能性を示唆している。児童期から青年期（6歳から18歳）に、虐待（身体的、性的、家庭内暴力）に合うと、感情を生み出す扁桃体と記憶に関わる海馬の体積が減少し、危険を適切に察知する機能（恐怖への条件づけ）が乱れ、脅威と安全を識別できなく

なることが分かった (McLaughlin, et al., 2016)。さらに、脳の他の部分の反応性も増加することが明らかになり、小児期の虐待経験によって、より広い領域の脳構造の神経ネットワークに影響することが示唆されている (Hein, et al., 2017)。また、虐待による心的外傷後ストレス（以下 PTSD）は、女性よりも男性の方が、脳梁と呼ばれる右脳と左脳を繋ぐ橋の役割をする部分の面積と体積が減少する傾向があることが分かっている (Bellis, et al., 1999)。Teicher ら (2016) は、虐待によるストレスを受けると、感情の調節を行う部分の脳発達に影響する可能性を示唆している。このように乳幼児期からの虐待などの極度な負感情経験は、脳発達に大きな影響を及ぼすことも明らかとなっている。

一方、虐待などの無い普通の家庭に育った子どもの中にも、親との情緒的・精神的結びつきが弱く、親を心の支えにできず、不安なまま成長するケースもある。育つ過程でのそれら負感情経験は、怒りのコントロールを困難にし、青年期の家庭内暴力に繋がることも示唆されている (福泉・大河原, 2013)。大河原 (2011) は、キレやすい子、落ち着きの無い子、いじめ加害者などの問題行動の要因として子どもの感情抑制の発達不全を指摘し、特に発達過程における母親との愛着関係のシステム不全に注目している。乳幼児期に、子どもの悲しみ・怒り・不安などの負の情動やお腹が空いたなどの身体的感覚からくる泣き、ぐずりに対し、適切な応答がなされない状況が継続すると、負感情経験に対する感情コントロールが困難になる可能性があることを報告している (大河原ら, 2011)。母親からの負の情動・身体感覚否定経験の認識がある子どもは、自己存在感が希薄で、家庭内暴力（経験・願望）との関連が示唆されている (福泉ら, 2013)。また、児童期（8歳から12歳頃）の過剰な行動抑制が、青年期における対人関係能力の欠如に繋がるという報告もある (Serge Ballespi, et al., 2018)。

児童期における負感情経験に関しては、山野ら (2013) によれば、小学校5年生の学校におけるもっとも大きなストレス経験は、友人関係（例：仲間外れ、無視、悪口、いじめ、喧嘩）であることが報告されている。一方、負の感情を引き起こす幼児期からの喧嘩経験については、経験頻度が高いほど、喧嘩相手（親・兄弟・友人）や喧嘩の方法（暴力・言語・沈黙）に関わらず、青年期になってからも喧嘩頻度が高いという強い相関も示されている (藤村, 2017)。また、児童期から現在までにいじめ被害経験がある大学生は、経験が無い大学生とくらべて自尊感情が低い傾向があり、児童期からの負感情経験が青年期以降まで影響する可能性が示唆されている (吉川ら, 2013)。

これらの先行研究より、幼児期からの負感情経験が心の成長に大きな影響を及ぼすことが予想される。しかしながら、家庭でのマルトリートメントなど著しい負感情経験以外に、子どもがどのような負感情経験をしているかはあまり明らかではない。また、いじめや不登校などの学校に関わる負感情経験も想定される。さらに児童期以降にも家庭や人間関係に関する負感情経験は多々考えられるが、具体的にどのような負感情経験をしているかについても明らかではない。

そこで、本研究では、家庭・学校などの子どもを取り巻く人的環境において幼児期から青年

期までに、一般的に、どのような負感情経験があるのか具体的項目として抽出することを目的とし、青年期である大学生に過去を振り返ってもらい、負の感情経験についての情報収集を行うことにした。しかしながら、幼児期の記憶は、非常に曖昧であることが示唆されており（上原，2006）、本研究開始前の大学生3名を対象としたパイロットテストでも、幼児期の記憶を収集することは困難であった。そのため、幼児期の負感情経験については、大学生とは別に情報を収集し、補完する必要があると考えた。幼児期の情報を収集するために、多くの子どもの感情経験を見守り、養育者との関わりから子どもの家族関係や家庭問題を客観的に見てきたベテラン幼稚園教諭から情報を得ることにした。本研究の目的は、幼児期から青年期までの一般的な負感情経験を抽出することであり、ケーススタディなどの個別事例について言及するものではない。従って、個々の対象者における幼児期から青年期までの一貫した負感情経験である必要は無く、大学生からは、一般的な児童期・青年期の負感情経験を抽出し、ベテラン幼稚園教諭からは、一般的な幼児期の負感情経験についての情報を収集することとする。

本研究では、先ず研究1として幼稚園教諭を対象に幼児期における子どもの負感情経験についての面接調査を行った。次に研究2として大学生を対象に幼児期から現在までの負感情経験についての面接調査を行った。最後に、研究2で得られた負感情経験項目を基に、研究1で得られた幼児期における子どもの負感情経験の項目を追加して、幼児期からの負感情経験項目を抽出した。

2. 倫理的配慮

調査について、先ず玉川大学倫理審査委員会「人を対象とする研究に関する倫理審査」を受け承認を得た。

参加者へは、研究目的、意義、参加者として選出された理由、研究に参加することで生じる負担、リスク及び利益が無いこと、研究への協力は任意であり、参加に同意した後でも自由意思で参加を取りやめることや研究を中断できること、面接の録音内容は直ちにデータ化し、暗証番号による管理を行い、パスワードをかけ、研究を依頼した施設で厳重に保管すること、学術雑誌や学術集会では研究協力者が特定されない形で結果を公表すること、公開における個人情報の取り扱いは法律に準ずる形で行うこと、研究終了後に紙類はシュレッダーにより破棄されること、データ類は完全に消去されることなどを口頭で説明し、実験説明書を文書で手渡し、内容について確認を得、研究同意の署名を得た後、調査を開始した。

3. 研究1

3-1. 研究1の目的

幼児期からの具体的な負感情経験について、大学生の記憶の曖昧さを補完するために、ベテラン幼稚園教諭を対象として、一般的に見られる幼児期の負の感情経験を抽出することを研究1の目的とした。

3-2. 研究1の方法

面接対象：K県内N幼稚園教諭5名（女性5名、平均年齢42歳、最低年齢34歳、最高年齢58歳、標準偏差8.74、平均勤続年数21年）が参加した。参加者は、できるだけ幅広い年代に渡ること、子どもについての知識・経験ともに熟練している勤続10年目以上のベテラン教諭であることの2点に配慮した、コンビニエント・サンプルであった。

面接方法：半構造化面接で行い、質問項目は以下の通りである（表1）。半構造化面接であるため、以下の質問項目を口頭で尋ねた後、参加者の内容に合わせて、より具体的な質問を実施した。面接場所はN幼稚園の応接室を使用した。応接室は収容人数8名程度の広さで幼稚園教諭との面接内容が外部に漏れずに落ち着いて話せる静かな環境であった。倫理的配慮について、面接調査の実施者（第一著者）がN幼稚園管理職であることから、大学生への面接調査と同様の内容に加えて、どのような発話内容があったとしても人事評価に影響を及ぼすものではないことを、文書と口頭で説明し、面接参加者の同意を得た。面接の内容は全て調査実施者本人がICレコーダーで録音し、録音データを逐語的に書き起こした。

表1 幼稚園教諭への質問項目

		具体的質問内容
質問1	気になる子どもの情緒問題を尋ねる	子どもの感情コントロールについての個人差と、その背景にある問題や親子関係についてお聞きします。これまで感情・情緒面で気になるようなお子さんで、心に残る子を思い出し、その子についてのエピソードや抱えていた問題について教えてください。
質問2	その子どもが抱えていた人的環境について尋ねる	幼児期から小学生時代の前半における親子関係といったアタッチメントを含めた子どもの人間関係の中で、その子どもにとって重要だと思う出来事を教えてください。

3-3. 研究1の分析方法

1記録単位：ICレコーダーに録音された5名分の発話内容は、全てエクセルに発話データとし

て保存された。得られた発話データから、5名それぞれについて感情が言語化された部分を抜き出し、Berelson（1952）の内容分析の定義（注1）に従い、2段階の記録単位で切片化した。切片化されたデータは記録単位ごとにナンバリングをした。記録単位は以下の表2の通りである。

表2 2段階の記録単位の定義

記録単位番号	分 類	定 義
【記録単位1】	「発話」	1つの意味内容を中心に、センテンス（句点から句点まで）をまとめて1つの「発話」とした。
【記録単位2】	「感情エピソード」 （以下「エピソード」）	感情経験のエピソードごとに「発話」をまとめて1つの「エピソード」とした。

2 KJ法：KJ法（川喜田，1967）を用いて、「エピソード」を2つの感情（正・負）に分け、さらに子どもに関する内容と、両親についての内容とで分けた後、個々の記録単位を意味内容の類似性に基づいて分類・命名し、カテゴリー生成して幼児期の感情経験項目を抽出した。

3 感情言語化数分析：カテゴリー生成を行った後、「エピソード」を各カテゴリーに評定した。カテゴリー評定は筆者と修士課程の大学院生1名とが事前にカテゴリーの定義判定基準を確認し、それぞれ評定を行った。全データの10%について検討したところ、2者の一致率は87.5%であった。不一致については話し合いでデータを一致させた。具体的には「空気が悪ければさ、察しちゃうんじゃないかなってところは（略）これは、子どもにとってね、伝わっちゃうんじゃないかって、不安定っていうか」という発話に関し「不安定」という感情言語の主体が子どもか母親かに分かれた。検討の結果、子どもと母親の両方にカウントすることにした。また、面接参加者自身の経験や家族に関する発話部分は客観性を欠くと判断し削除した。感情言語化数のカウントは、各カテゴリーに評定された感情経験の「エピソード」数を集計した。最大値に上限は無い。

3-4. 研究1の結果：幼児期の負感情経験項目

参加者5名の平均面接時間は約45分（最少面接時間は30分，最大面接時間は90分）であった。全「エピソード」数は170（平均34），このうち負感情経験は150，正感情経験は20であった。

大カテゴリーは、「子どもの正感情」「母親の正感情」「子どもの負感情」「母親の負感情」の4つであった。本研究の目的は、幼児期からの負感情経験項目を抽出することであり、大カテゴリーの正感情（子どもの正感情，母親の正感情）については項目の抽出対象から外すことにした。大カテゴリー「子どもの負感情」の下位カテゴリーは「子どもの過度な感情抑制場面（40エピソード，24%）」「子どもの感情抑制不能場面（17エピソード，10%）」「その他の場面（7エピソード，4%）」「子どもの固執・非柔軟的場面（4エピソード，2%）」の4つであった。大

カテゴリー「母親の負感情」の下位カテゴリーは「母親の非柔軟的態度（16エピソード, 9%）」「母親が語る夫婦喧嘩（15エピソード, 9%）」「母親の非受容的態度（13エピソード, 8%）」「母親の放置的態度（11エピソード, 6%）」「母親のその他の不安定な感情（11エピソード, 6%）」「母親の支配的態度（7エピソード, 4%）」「母親以外の人間関係（6エピソード, 4%）」「母親の過干渉場面（2エピソード, 1%）」「母親の一時的な不在（1エピソード, 1%）」の9つであった。

下位カテゴリーのうち、最もエピソード数が多かったのは「子どもの過度な感情抑制場面」についてであった。具体的には「（幼児なんて空気が読めなくて当たり前なのに）読めちゃってる子が多くて、先生の思いとか、お母さんの思いとかを結構感じて動くとか」であった。第二に「子どもの感情抑制不能場面」についてで、具体的には「暴れちゃうの、どうしても」であった。

子どもの情緒問題に影響する人間関係の発話の多くが母親に関する内容であった。最もエピソード数が多かったのは「母親の非柔軟的態度」についてであった。具体的には「多分昔のお母さんも『しっかりしなさい』と言っていたのですけれど、その基準が凄く厳しくなっている気がします」であった。第二に「母親が語る夫婦喧嘩」についてであった。幼稚園教諭の発話から抽出された幼児期の子どもの負感情経験を表3に示す。

表3 幼稚園教諭の発話から抽出された幼児期の子どもの負感情経験

*以下で（EP）は感情経験エピソードの略である

大カテゴリー	下位カテゴリー	EP 個数 (%)	「具体的な発話内容」 (※下線は内容の意味として重要な発話部分)
子どもの負感情	子どもの過度な感情抑制	40 EP 24 %	「読めちゃっている子が多くて、先生の思いとかお母さんの思いとか。」「お父さんと、お爺ちゃんが厳しくて、その子は自分の思いを言葉で表現するのが苦手だった」「本当は（その子どもは）身体を動かして遊ぶのが好きなのですが、凄く自信が無くなって、…（略）…「 <u>顔色は見ちゃう（親の）。</u> そうやって（親が）不安だとね、親の顔色は見ちゃう。いまは、ここやったらダメかな？って。（略）見て行動しちゃう」
	子どもの感情抑制不能	17 EP 10 %	「暴れちゃうの、どうしても」「泣いて、叫んで、他の子を受け入れなかった」「 <u>吃音が出たり、暴力的になったりして、ソファをこわしちゃったりする。普段はそんなことしないのに。</u> 」「一番、自己コントロールみたいなのが崩れやすいというか、 <u>受け入れて欲しくて（感情が乱れたり、アピールをしたり）</u> ってというのは、 <u>下の子（弟や妹）</u> ができたり、生まれたりすると、 <u>顕著に出るなって</u> 」「（原因は分からない、もともと性格もあるのかも知れないが） <u>衝動的になりやすい子で、自己コントロールがしにくい子も居るのですが、…（以下略）</u> 」
	その他	7 EP 4%	「しっかりした子なんだけど、徐々に嘘をつくようになって。自分がやったことも、やってない、で通す。その子は泣けない子だった」「10年前は、楽しいことは楽しいってできて、でもちょっと寂しい部分を先生で埋めてるっていう感じだったのが、今の子は、 <u>自信も無ければ、なんか満たされてない感じが、すべてに影響していると感じる</u> 」
	子どもの柔軟的態度の非	4 EP 2%	「（他の子どもと）共感（し合うことができない）と言うか、自分の気持ちを譲れない。…（略…）泣いて騒いで（他の子どもの意見を）受け入れられなくて。人の意見は受け入れられない。自分のことを押し通そうとする」…（略）…（小学生になって、外では）コントロールが効かない。（幼稚園時代、家では母親に言われて弟や妹の面倒を見る）いい子だったのに。（略）もっともっと甘えたかっただろうに、 <u>どっかバランスが悪い</u> 」

幼児期からの負感情経験項目の抽出

母親の負感情	母親の非柔軟的態度	16 EP 9%	「…ただ、お母さんの思い通りにしていこうとするような指示も多くて」「お母さんの意見がとて <u>とても強い</u> ので、(子どもから)お母さんになかなか正直な意見が言えない」「お母さんがすぐこう、きちんとしていたい、っていうのが <u>凄く強い</u> のと、朝も泣いてお母さんから離れられないのですが、 <u>それが凄くお母さんは嫌</u> 。男の子なのに、とか、もうこんなことで泣かないで、とか、そういう気持ちの方が強くて」「その子に対する <u>一個一個が気になって</u> 、カバンをちょっと(土の上に)引きずっても、 <u>ちょっと汚いからやめてよ</u> 、とか、そういうのをずっと受け入れずに、 <u>きちんとお母さんの思う姿じゃないことを、ずっと、ああしてよ</u> 、こうしてよ、もう、もう、っていうのがある」
	母親の非受容的態度	13 EP 8%	「子どもらしさ、みたいなものを大らかに認められないというか。」「子どもの様子について <u>淡泊</u> (印象を受けた)で(略)『(この子は)言うことを聞かないので。(もう取り合わない)』『やっとうと、泣いて(先生の所に)来られるようになった。お母さんにも伝えて、園でもこうしてみるので、家でも(お子さんのどんな様子も受け入れて)きゅっとして(抱きしめて)あげて下さい、と』『ご両親がとて <u>も理性的</u> でした。すごく、きちんとしていたい、というのが強く、朝、(子どもが)泣いてお母さんから離れられない様子を、お母さんは嫌がりました。男の子なんだから、こんなことで泣かないで、って。(略)お腹が大きいから(そのお子さんを)抱っこできないとか、っていう子は、アピールをしますね(かわいいんです)』『まだまだ、スキンシップとかで(母親の)気持ちを確かめる年代と言うか、そういう子もいるのだろうけど、(スキンシップを求められても)しない、あんまり触られたくないんだよね、っていうお母さんもいる。子どもとのそういう小さいすれ違いが起きているのだろうなって」
	夫婦喧嘩 母親が語る	15 EP 9%	「喧嘩をしているとやっぱり、お母さんにストレスが、 <u>多分</u> 。」「喧嘩した後の空気って、しゃべらなかつたりするじゃない？それって(部屋の中に)凄く空気が漂っているんじゃないかって。」「両親が離婚した当時は気の合う友達一人と時々話すくらいで、ほとんど室内で過ごしていた。浮いている感じがして気になって声をかけるんだけど、 <u>なかなか心を開けなかった</u> 。(卒業した後に遊びに来てくれた時に)その時の記憶がないと話していた。」
	母親の放置的態度	11 EP 6%	「(夜に子どもを置いて外出するとき)泣くのですよね、毎回、って。お母さんはその時どうするのですか？と聞くと、別に置いて行きますけど。みたいな感じで」「 <u>使い古した靴をずっと履いていたり、サイズも小さくてきついのに</u> 」「(子どもが)気持ちが難しい。どろどろになって遊んでも、着替えることが嫌で、凄く拒絶で、幼稚園の服も着たくないし、自分の着替えも着たくない、本当にどろどろのまま、(略)泣いて、暴れて、だった。お母さんに事情を話しても、全然気にしてなくて、他にもオムツが結構(長い間)外せなくて、トイレを嫌がったり、泣いたり、あとはもう抱っこ。先生に抱っこを求めて来て、両手をあげる感じ。(略)子どもについて(話しても)凄くさっぱりしていて、なんか、もう全然いいです。みたいな」
	母親の不安 定な感情	11 EP 6%	「子どもって、こんなことして当たり前！子どもって、こういうもの、っていうのが分からないまま、子育てをしていると、苦しいお母さんもいるのだな。」「(下の子が入園すると)お母さんの表情が(これまでは不安そうだったり、教員から園での子どもの様子について話すことに)拒否的だったりしたのが、 <u>何か晴れたように変わって</u> 、すると、上の子どもも明るくなった印象を受けた」
	母親の支配的態度	7 EP 4%	「下の子の面倒を(上の子に終始)見させるとか、洗濯物を畳ませるとか。」「(子どもが他にやりたいことがあったりして、手伝いをしたくないときでも)いいんです、これはこの子の仕事なので、と、お母さんの家事の手伝いをさせていた」
	母親以外の人間関係	6 EP 4%	「お父さんも、お爺ちゃんも、 <u>厳しくて</u> 」「(お父さんが、子どもの)手をたたいたり、とっさに(手が)出る。その頻度がどれくらいか、わからないけれど、 <u>厳しい</u> 。お父さんのご両親も厳しい。 <u>強く言えば何とか</u> なのは、その時だけなのに」
	母親過干渉態度	2 EP 1%	「指示を出さないと(子どもが何も)できない。 <u>全部やってあげているから</u> 。」
	母親の一時的な不在	1 EP .5%	「下に双子の赤ちゃんが産まれて(母が)入院したときは、(子どもは園で)ずっと手が出ていた。お母さんもういっぱいだったし、でも本当に、 <u>衝動的</u> っていう感じでした。 <u>なんでも取っちゃう、なんでも崩す、なんでもたたいて回る</u> みたいなのはありましたね。(略)お母さんも気づいていて、少しずつ2人の時間を取る様にして(教員とも共有して)ちょっとずつ(良い方に)変わって行って」※このエピソードは1つであったが、他のエピソードの中でも母親の不在による子どもの負感情経験について、発話があったことと、一般的に多い負感情経験の例であることから、項目として挙げることにした

4. 研究2

4-1. 研究2の目的

青年期である大学生を対象に、親や兄弟・教師・友人など個人を取り巻く人的環境の中での感情経験を思い出すことで、主に幼児期から青年期までの具体的な負感情経験を抽出する。最終的に研究1で抽出した幼児期の子どもの負感情経験を補完項目とし、幼児期から青年期までの負感情経験を抽出することを目的とする。

4-2. 研究2の方法

面接対象：都内私立大学大学生5名（男子2名，女子3名，平均年齢22.00歳）が参加した。参加者は、教育学部の心理系ゼミに所属する学生の中から調査に協力してくれたコンビニエント・サンプルであった。

面接方法：各学生に対し、以下の質問項目（表4）を半構造化面接で行った。面接場所は都内私立大学の教室を使用した。教室は収容人数15名程度の広さで、学生との面接の声が外部に漏れず、落ち着いて話せる静かな空間であった。質問内容は、幼児期から現在までで記憶に残っているようなライフイベントや感情が動かされたような経験について尋ねる質問であった。面接の内容は全て調査実施者本人がICレコーダーで録音し、録音データを逐語的に書き起こした。

表4 大学生への半構造化面接のための質問項目

大学生への質問項目		具体的質問内容
質問1	家族構成	家族構成について教えてください
質問2	幼児期の感情経験について	幼児期のあなたにとって、ご両親を含めて重要で大好きな大人は誰でしたか？その人との心に残るエピソードはありますか？
質問3	児童期の感情経験について	小学校時代の人間関係の中で心に残るエピソードは何かありますか？ご両親、先生、ご友人、ご兄弟（姉妹）、習い事ではいかがでしたか？
質問4	青年期の感情経験について	中学時代や高校時代それぞれの人間関係の中で心に残るエピソードは、何かありますか？ご両親、先生、ご友人、ご兄弟（姉妹）、習い事や課外活動ではいかがでしたか？
質問5	もっとも心に残る重要な感情経験について	これまでの人生で強く心に残る深刻なできごととは何かありますか？苦しかった時、話ができる人がそばに居ましたか？

4-3. 研究2の分析方法

1. 記録単位： 研究1と同様に、得られた発話データから、感情が言語化された部分を各参加者について抜き出し、Berelson（1952）の内容分析の定義（研究1と同様：注1）に従い、2段階の記録単位（「発話」と「エピソード」）で切片化した。切片化されたデータは記録単位ごとにナンバリングをした。

2. KJ法：KJ法（川喜田，1967）を用いて、「内容」を2つの感情（正・負）に分け、負感情経験を抽出するために、質問のカテゴリーである5つの人的環境を基に①家庭内での問題、②親の行動問題、③友人関係の問題、④教師との関係の問題、⑤課外活動での問題の、5つの大カテゴリーを作成した。大学生が語る感情経験エピソードは、小学校・中学校・高校時期の時間軸を持ち、感情経験の内容も多岐に亘っているため、多様な視点からの分類・統合が必要である。KJ法は、発話内容を切片化したものを類似性で分類・統合するものであるが、本研究は、時間軸・感情の異なる次元（種類・強さ・時期・期間）を考慮することが必要であると考え、プロパティとディメンジョンという下位項目から上位概念を作成できるM-GTAの概念抽出方法を用いることにした。以下にその方法について詳細に述べる。

3. M-GTA法：幼児期から青年期までの負感情経験項目を作成するため、負感情経験「エピソード」を分類・命名する際、M-GTA法の一部を応用した。カテゴリー抽出の際は、戈木（2006）の概念抽出の方法の定義に従い、木村（2010）の感情の生起に関する分析を参考にした。「エピソード」を構成する負感情経験について、客観的に捉えるための要素（プロパティ）を定め、各「エピソード」ごとにデータ（ディメンジョン）を抽出した。プロパティとディメンジョンの例は以下の通りである（表5）。

表5 各エピソードのプロパティとディメンジョン

プロパティ	ディメンジョン
起こった年代	幼児期，小学校，中学校，高校，大学
感情の種類	悲しみ，怒り，くやしき，嫌悪，負感情経験からの調整
感情の度合い	軽，中，重
感情の継続した期間	幼児期，小学校，中学校，高校，大学の〇〇月から××週間
感情の原因となったできごと	※状況の言語化
感情経験の結果，取った行動	自己正当化，他者批判，感情抑制，感情抑制不能，攻撃的態度，反発的態度，不服，疎外感，調整的態度，自己嫌悪，評価不安，関係性の悪化，傷つき，内省，泣き，羞恥心，回避，問題対処，自己抑制の日常化など

抽出したディメンジョンから、各「エピソード」の感情経験ラベル（ラベル1）を作成した。さらに「エピソード」ごとに生起した感情のラベル付け（ラベル2:①悲しみ要因，②怒り要因，

③くやしさ要因, ④嫌悪要因, ⑤感情調整要因, ⑥難しさ要因)をした。ラベルの例は以下の通りである。

表6 各エピソードの感情経験ラベル

人的環境	ラベル1 (感情経験ラベル) の例	ラベル2 (生起感情) の例
① 家庭	過度な自己抑制の反動としての感情抑制不能	怒り要因
② 母親	母親の厳しい態度による自己抑制の日常化	悲しみ要因
③ 友人	友だちとの不適応による他者批判と攻撃的な態度	怒り要因
④ 教師	教師の非擁護的な態度による絶望	悲しみ要因
⑤ クラスや課外	部活の先輩との不適応による他者批判と自己正当化	怒り要因

ラベル付けは、筆者と修士課程の大学院生1名とが事前にカテゴリーの定義判定基準を確認し、全データの10%について評定を検討したところ、2者の一致率は88%であった。不一致については話し合いでデータを一致させた。具体的には「キャプテンという組み立て方も分からなくて(略)下の学年は(部活の後輩が)10人もいて、難しいなと思いながらやっていたんですけど(略)同級生の存在って言うのは凄く大きかったです」という発話に関し、難しいなと思いながらチーム作りを行う気持ちについて、感情経験ラベル2(生起感情)の「難しさ要因」か「悲しみ要因」かで、意見が分かれた。チームをうまくまとめられないもどかしさは、本人の意欲を損なっておらず、自己否定に近い「悲しみ要因」というよりは、困難へ挑戦することで自己肯定感を増している可能性が高いので「難しさ要因」とした。

ラベル付けをした後、各「エピソード」について、その感情の意味内容同士が類似するラベルを統合し、さらに抽象化して、カテゴリー同士の関連が詳細に把握できる状態(理論的飽和)に近づいた段階で、これを最終的なカテゴリーとして決定した。その結果、5つの大カテゴリーと16の下位カテゴリーが生成された。

4 感情言語化数分析：最後に、各大カテゴリーに評定された「発話」数と、発話中に感情を言語化した頻度である「感情言語化」数を集計した。最大値に上限は無い。

4-4. 研究2の結果

4-4-1. 大学生の回想による幼児期からの負感情経験項目

参加者5名の平均面接時間は約60分(最少45分から最大90分)で、全「発話」数は446発話で平均発話数は89.2発話であった。このうち「発話」の内容理解ができるものは437発話で、これを分析の対象とした。437発話のうち正の感情経験に関する発話は139発話、負の感情経験に関する発話は158発話、感情の統制が取れている経験に関する発話は33発話、その他の発話は107発話であった。負の感情経験に関する発話の中で最も多かったのは両親に関する発話

で48発話（30%）、次に多かったのは課外活動に関する発話で46発話（29%）、3番目に多かったのは教師に関する発話で40発話（25%）、4番目が友人に関する発話で24発話（15%）であった。

参加者5名の発話を感情経験ごとに切片化した「エピソード」数は110で、全感情言語化数は652語であった。このうち負の感情言語化数は343語（53%）、正の感情言語化数は242語（37%）、感情の統制が取れた状態の言語化数は67語（10%）であった。

大カテゴリーは「家庭内での問題」「親の行動問題」「友人関係の問題」「教師との関係の問題」「課外活動での問題」の5つの人的環境であった。大カテゴリー「家庭内での問題」の下位カテゴリーは「親の不在」であった。大カテゴリー「親の行動問題」の下位カテゴリーは「親の厳格な態度」「親の非受容的な態度」「親の精神不安」の3つであった。大カテゴリー「友人関係の問題」の下位カテゴリーは「友人関係からの疎外」「いじめ」「友人との意見の不一致」の3つであった。大カテゴリー「教師との関係の問題」の下位カテゴリーは「教師からの無理解」「教師からの非擁護」「教師の非柔軟的な態度」の3つであった。大カテゴリー「課外活動での問題」の下位カテゴリーは「部内の仲間との共感不全」「部内の仲間や先輩から評価されない」「部内の仲間にはける経験、失敗経験」「部内の仲間との意見の不一致」の4つであった。大学生を対象とした幼児期からの負感情経験の詳細は表7に示す。

表7 幼児期からの負感情経験の抽出：大学生への面接から

負の感情経験 発話数%	大カテゴリー	下位カテゴリー	「具体的な発話内容」 (全158発話から抜粋)	◆抽出された25項目 ※複数の下位カテゴリーに該当する抽出項目は1つ選択した
48発話 30%	I 家庭内での問題	親の不在	「母親（父親）が仕事で家に居ることが少なく、寂しい思いをした」「よき理解者の母親が、からだのどこかに痛があって、入院して、手術をして（軽くすんで今は元気だが）。家に居ないときは、心細かったり、なんだろう、苦しいというか、寂しさだったりとか。もしものことを考えちゃったりとか。今まで生きて来た中で言えば、辛いと言うか、怖かった」	◆母親（父親）が仕事などで家に居ることが少なく、寂しい思いをした
	II 親の行動問題	親の非柔軟的な態度	「親から顧問にいて、（部活を）辞めさせられてしまって」「親に（習い事を）辞めたいって言ったけれど、辞めさせてもらえなくて」「（進路を決めるのに）私はT大学がいいって。でも親に連れ出されて他のオープンキャンパスに嫌々行ってきましたね」「お父さんは強面なので、えへへ。なんだろう、（お母さんとの楽しい思い出に対し、お父さんとの間に楽しいことが）何かあったかなって感じなんですけど。顔が怖いから、ちょっと近づきたくなかったかなって思うんですけど。あはは」「小学生になってからはちょっと厳しくなったっていうか、そういうのを凄く感じましたね。（今は理解できるけれど）当時は、口うるさいな、みたいな感じでした」「鉛筆の持ち方とか、背筋ちゃんと伸ばしてとか、そういう細かいことをよく言われましたね」「お兄ちゃんではできてるのに、なんでできないの？みたい兄と比較されることがあった（略）いや、私は私だから、とか、関係ないじゃん、とか、怒ったりとか。親に期待に応えられないっていうか」「自分がしたことを、頑張ったね、とか、そういう誉め言葉は凄く嬉しかったのを覚えています」	◆母親（父親）から厳しくされ、心が傷ついた ◆母親（父親）のしつけが厳しくて嫌な思いをした ◆母親（父親）が口うるさくて嫌な思いをした ◆母親（父親）に自分の努力よりも結果について完璧な状態を期待されて苦しい思いをした ◆母親（父親）が自分と兄弟姉妹とを比較評価したり、兄弟姉妹を最良したりして、悲しい思いをした。

		親の非受容的態度	「(学校でのいじめについて) 親に相談したら、あなたが悪いのよって。そっか、私が悪いのかって、思って。」 「兄が2つ上なんですけれど、私が生まれてきて、兄はお母さんを奪われちゃったみたい、取られちゃったみたい。その後、幼稚園に上がってからは、こんどは兄が甘えん坊で。それでお母さんを取られるみたい。で、お父さんの方へ行く、みたい」	◆日常であったことや、学校で上手く行かなかったことを母親(父親)に話しても、相手にされず悲しい思いをした ◆母親(父親)に無視されたり話を聞いてもらえず寂しい思いをした
		不安の精神	「話せなかったですね、まだ下が小さいので。小6の時にまだ幼稚園ぐらいで。それでなんか、大変。面倒見るのが(親が)大変そうだから、顔色見ちゃって。(略)迷惑をかけたくなかった」	◆母親(父親)がイライラして精神不安だったり、不健康だったので心配だった
24 発話 15 %	Ⅲ 友人関係問題	仲間外れ	「クラスの女子から、ちょっとハブられたことがあって」「小学校の時は、おーい、遊ぼうぜって感じだったのに、中学に上がったら急に敬語使えて(よそよそしくなると)あれ、そんなんじゃないかって(中略)裏切られたというか」「ちょっと何か、避けられて」「ベア作ったりできなくて」	◆友だちから疎外されて孤独になり寂しい思いをした ◆友だちとの関係で疎外感を感じることがあった
		いじめ	「小学校6年生の時に凄くて。(略)まあ、いじめられちゃいました。親も信じられない、先生も信じられない、友達も嫌だ、みたいな時期は、1年くらいありました」「無視されたり、机廊下に出されちゃったりとか」「朝行くと机が廊下に出ていた」「黙って耐えて。親にも言えなくて、先生もそのいじめてた本人たちが中学受験控えていて色々ストレスを抱えていて(略)気づいてもあんまりなんかできなかったみたいで。耐えて、耐えてって感じ」「最初は隣のクラスの子と少し話すことがあったんですけど、何かその、だんだん悪化するにつれて、その子もだんだん話してくれなくなった」	◆信頼できる、仲の良い友達がいないかった ◆いじめられて、辛い思いをした ◆学校生活が楽しくなかった
		意見の衝突	「何か爆発しちゃったっていうのも、不満が溜まっちゃったっていうのもあって。」「(以前に頑張って言い返したことがあったが逆に言い負かされたことがあって) どうせまた(何を言っても)だめだろうって、我慢して」「頑張って言っても思いが全然伝わらなくて。(略)もういいかなって、思っちゃって。それ以降はあんまり。(その友だちにはなんでも) うん分かったって、言うようになってました」	◆友人関係において意見の衝突といったトラブルがあり嫌な思いをした
40 発話 25 %	Ⅳ 教師との関係の問題	教師からの無理解	「これね、みたいな感じで楽譜を渡されて(自分はみんなと合唱がしたかったのに) ああ、またかって。伴奏をやらされて。」「(志望校の相談をしても相談に乗って貰えなくて) もうちょっと親身になって欲しかったのに」	◆自分の目標や価値観が教師と合わず、不満だった
		教師からの非擁護	「(いじめについて) 先生にも相談したけれど、先生もストレスを抱えていたみたいで、何か気づいてもあんまりできなかったみたいで。」「(部活動にあまり来ない教師に対して) あ、そうですか、って。(たまにしか来ないのにいろいろ言われて) はい、はい、って」	◆教師が辛い時に頼れず嫌な思いをした ◆先生に、学校生活や進路のことを相談したが親身になって貰えず、悲しい思いをした
		教師の非柔軟的態度	「先生にけっこう怒られてました。自分ではそんなにやんちゃしていたって気はないんですけど。(略)忘れ物取りにきましたって言うだけのところに、そうなんか、怒られて。そのぐらいで怒られると思っていなかったの。何で先生、こんなに怒るんだろうって」「勉強が出来なくて(小テストの点が) なかなか上がらなくて。で、授業中お前寝てるのか? みたいな。そんな怒られ方をして(略)」	◆教師に、非柔軟的で厳しい態度で叱られて嫌な思いをした ◆先生から、心を傷つけられる言葉を言われた
46 発話 29 %	Ⅴ 課外を含む集団活動での問題	部内の仲間との共感不全	「真面目な僕と、イケイケな彼等とのギャップがあって。こいつらとは、仲良くやれねえなとか思いながら(中略)あいつらといっても、あんまり生産性ないな、とか」「熱の差があったのかな。何か、熱量というか。やる気だったりとかっていう面(中略)違いがあったのかなっていう印象があります」	◆部活で、仲間との一体感や、楽しみや苦しみを共感できなかった
		部内で評価されない	「(最後の大会だったのに) 私は選ばれなくて。でも私の方がその日は調子よかったのに」「(部長を狙っていたのに) なくなて」	◆部活で、先輩や教員やコーチなどから、自分が思っているほどの評価が得られず、悲しい思いをした

幼児期からの負感情経験項目の抽出

	る 部内 の 仲 間 に 負 け る 経 験 や 失 敗 経 験	「中学の頃は、部活の時間が殆どで。試合も全然負けてましたけど、真剣には、やっていました。(略)やだなあ、かえりたいなあ、とか。そんな試合も何度もありました。」「一緒にやっている子に対しても仲間でありライバルでもあるっていうところで、凄い、低学年ながらにして精神的に追い詰められていた」	◆クラスの活動で失敗し、とても恥ずかしい思いをした ◆部活で勝負に負けたり、失敗したり、仲間に負けたりして不満だった
	見 部内 の 仲 間 と の 意 義	「後輩が母親にチクって、それが顧問にいて、顧問から職員室で注意されるってことがあって。(略)あ、後輩チクったなって。」「(生徒会と部活の両立が出来ない仲間に対して)自分の好き勝手に生徒会長するとか、中途半端な感じが凄く嫌だったんで、それは凄く怒ったりとか。」「(略)怖いって言うのがあるのかなって。マイナスの方向？嫌われたくない、って気持ち」	◆部内での意見の不一致により、しばしば先輩や仲間に対してむかついた

4-4-2. 抽出された幼児期からの負感情経験項目（追加項目とその理由を含む）

表7に示すように、大学生の面接結果から25項目の負感情経験が抽出された。研究1の負感情経験の多く（例えば、親の不在や親の否定的態度による負感情経験など）は、研究2の結果とオーバーラップするものであるが全てではなかった。研究1でのみ得られた3項目と、研究2で得られた項目への補足である1項目の合計4項目を追加した。以下にその追加理由と項目を示す。

【いじめに関する項目の追加】

●友達に命に関わる様な危ない目に合わされ嫌な思いをした

研究2の大学生を対象とした面接調査で得られた負感情経験エピソードの中で、表7の下位カテゴリー「いじめ」には、無視されたり、机を教室から出されたりなどの心理的な要因による負感情経験が見られた。これらは、身体的な暴力による負感情経験と同様に、ひどくなると希死願望を持つような深刻な負感情経験にも繋がる。そのため、友人関係（特にいじめ）における負感情経験の極端な例を項目として追加することにした。

【教師の無理解に関する項目の追加】

●よく嘘をついて両親や先生に叱られて、嫌な思いをした

研究1の幼稚園教諭を対象とした面接調査で得られた子どもの負感情経験エピソードの中で、母親が厳しく、嘘をつく子どもについての内容があり、小学校に上がっても持続的に嘘をつく子どもがいて気になるとの内容があったため、表7の下位カテゴリー「教師からの無理解」に、幼児期からの負感情経験項目として追加することにした。

【両親の喧嘩に関する項目の追加】

●両親がよく口喧嘩をしていて、嫌な思いをした

研究1の幼稚園教諭を対象とした面接調査で得られた子どもの負感情経験エピソードのうち「両親の喧嘩」（表3の下位カテゴリー「母親が語る夫婦喧嘩」より）に関する負感情経験について、研究2では抽出されなかった（表7の下位カテゴリーに該当なし）。そのため、幼児期からの負感情経験項目として追加することにした。

【両親の離婚に関する項目の追加】

●両親が離婚して、悲しい思いをした

研究1の幼稚園教諭を対象とした面接調査で得られた子どもの負感情経験エピソードのうち「両親の離婚」（表3の下位カテゴリー「母親が語る夫婦喧嘩」より）に関する負感情経験について、研究2では抽出されなかった（表7の下位カテゴリーに該当なし）。そのため、幼児期からの負感情経験項目として追加することにした。

最終的に得られた「幼児期から青年期までの負感情経験項目」29項目を表8に示す。

表8 幼児期からの負感情経験項目の抽出：幼稚園教諭・大学生への面接から

研究2下位カテゴリー	抽出項目（29項目）		研究1の下位カテゴリーとの共通性
該当なし	※以下は、上記（4-4-2）の追加理由で追加した ①両親がよく口喧嘩をしていて、嫌な思いをした		子どもの過度な感情抑制・その他
母親（父親）の不在	②母親（父親）が仕事などで家に居ることが少なく、寂しい思いをした		母親の一時的な不在・子どもの過度な感情抑制・子どもの感情抑制不能
該当なし	※以下は、上記（4-4-2）の追加理由で追加した ③両親が離婚して、悲しい思いをした		母親が語る夫婦喧嘩・母親のその他の不安定な感情・子どもの過度な感情抑制
母親（父親）の非柔軟的態度	虐待	④母親（父親）から厳しくされ、心が傷ついた	母・子どもの過度な感情抑制・子どもの感情抑制不能
	躰 厳格	⑤母親（父親）のしつけが厳しくて嫌な思いをした	母親の非柔軟的態度
	過干渉	⑥母親（父親）が口うるさくて嫌な思いをした	母親の過干渉
	完璧を期待	⑦母親（父親）に自分の努力よりも結果について完璧な状態を期待されて苦しい思いをした	母親の非柔軟的態度
	兄弟姉妹内比較	⑧母親（父親）が自分と兄弟姉妹とを比較評価したり、兄弟姉妹を最良したりして、悲しい思いをした	該当なし
母親（父親）の非受容的な態度	軽視	⑨母親（父親）に日常であったことや、学校で上手く行かなかったことを話しても、相手にされず悲しい思いをした	該当なし
	無視・拒否	⑩母親（父親）に無視されたり話を聞いてもらえず寂しい思いをした	母親の放置的態度
母親（父親）精神不安	⑪母親（父親）がイライラして精神不安だったり、不健康だったので心配だった		母親のその他の不安定な感情
仲間外れ	⑫友だちから疎外され孤独になり寂しい思いをした ⑬友だちとの関係で疎外感を感じるがあった		該当なし
いじめ	⑭信頼できる、仲の良い友達がいなかった ⑮いじめられて、辛い思いをした ⑯学校生活が楽しくなかった ※以下は上記（4-4-2）の追加理由で追加した ⑰友達に命に関わる様な危ない目に合わされ嫌な思いをした		該当なし
意見衝突	⑱友人関係において意見の衝突といったトラブルがあり嫌な思いをした		該当なし
教師無理解	⑲自分の目標や価値観が教師と合わず、不満だった ※以下は上記（4-4-2）の追加理由で追加した ⑳よく嘘について先生に叱られて嫌な思いをした		該当なし その他
教師からの非擁護	㉑教師が、辛い時に頼りにならず、嫌な思いをした ㉒教師に、学校生活や進路のことを相談したが、親身になって貰えず、悲しい思いをした		該当なし
教師の非柔軟的態度	㉓教師に、非柔軟的で厳しい態度で叱られて嫌な思いをした ㉔教師から、心を傷つけられる言葉を言われた		該当なし
部内仲間共感不全	㉕部活で仲間との一体感や楽しみや苦しみ等を共感できなかった		該当なし

幼児期からの負感情経験項目の抽出

部内評価不満	㉔部活で先輩や教員やコーチなどから自分が思っているほどの評価が得られず、悲しい思いをした	該当なし
部内仲間失敗経験	㉕クラスの活動で失敗しとても恥ずかしい思いをした ㉔部活で勝負に負けたり失敗したり仲間に負けたりして不満だった	該当なし
部内仲間意見衝突	㉔部内での意見の不一致により、しばしば先輩や仲間に対しむかついた	該当なし

5. 考察と今後の課題

本研究の目的である幼児期から青年期にかけての負感情経験の具体的な内容は、大まかに抽出することができた。家庭での負感情経験は、親との関係によるものが大きく、両親の喧嘩や離婚は子どもにとって大きな心の負担となり負の感情を引き起こす経験になっている。また、母親との関係については、特に心理的距離の近い幼児期において、負感情経験が見られるが、児童期以降も母子関係によっては、会話の中で負の感情を経験していることが示された。福泉ら（2013）が指摘している様に、母親からの負の情動否定経験といった、母親との関係における負感情経験が、その後の子どもの自己存在感や家庭内暴力の経験・願望に繋がることが示唆される。児童期以降の負感情経験は、友人関係によるものが多いことが予想された（吉川ら、2013）が、本研究データからも「いじめ」に関する発言が見られた。友人からの一時的な仲間外れのような状態から、長期にわたる様々ないじめにより深く心が傷つくという負感情経験が示唆された。また、学校においては教師との関係や部活動での人間関係も児童生徒にとっては、大きな心の負担となることもあり、負の感情を引き起こす経験となっていた。

本研究の結果の中で「虐待・マルトリートメント」に関する内容として、大学生の発言内容（表7の下位カテゴリー）より「親の非柔軟的態度」「親の非受容的な態度」「親の精神不安」などが見られた。また、幼稚園教諭の発言内容（表3の下位カテゴリー）より「母親の非柔軟的態度」「母親の放置的態度」「母親の支配的態度」などが見られた。これらは、厚生労働省（2009）による「虐待・マルトリートメント（身体的虐待、性的虐待、ネグレクト、心理的虐待）」の4つの虐待のうち、主にネグレクトや心理的虐待に近い不適切な関わりではあるが、友田ら（2011）が指摘するような、極端な形の心理的虐待、身体的虐待、性的虐待、もしくは家庭内暴力などの内容は、抽出されなかった。

本研究で抽出された幼児期から青年期に至る負感情経験項目は、尺度として作成することで、今後様々な研究に役立てることができるため、非常に意義があると考えられる。尺度作成の段階においては、本研究では抽出されなかった多様な種類の「虐待・マルトリートメント」を尋ねる項目も追加する必要があると思われるが、今後の研究課題としたい。

附記

本研究は、角和麻衣子の2018年度修士論文の一部を再分析し加筆・修正したものである。

また、本研究の一部は、2018年9月の日本教育心理学会 及び2019年3月のSRCD (Society of research on child development) Baltimore, USA. で発表した。

注

- 1) Berelsonの内容分析は、表明されたコミュニケーション内容を客観的、体系的、かつ数量的に記述するための調査技法である。本研究で使用したその定義は「記述全体を文脈単位、1内容を1項目として含むセンテンスを記録単位とし、個々の記録単位を意味内容の類似性に基づき分類・命名する」ものである。

参考文献

- Akemi Tomoda, Yi-Shin Sheu, Keren Rabi, Hanako Suzuki, Carryl P Navalta, Ann Polcari and Martin H Teicher 「Exposure to parental verbal abuse is associated with increased gray matter volume in superior temporal gyrus」『Neuroimage 54(1): S280-6』2011
- Ballespi, A., Perez-Domingo, J., Sharp, C., Vives, J., & Barrantes-Vidal, N. 「Childhood behavioral inhibition is associated with impaired mentalizing in adolescence」『. PLoS ONE 13(3): e0195303』2018
- Berelson, B 『Content analysis in communication research』The Free Press, 1952 (稲葉三千男・金圭煥訳『内容分析』(社会心理学講座7) みすず書房, 1957)
- 福泉敦子・大河原美以「母からの負情動・身体感覚否定経験が攻撃性に及ぼす影響：家庭内暴力傾向との関係」『東京学芸大学紀要 総合教育科系 64 (1)』2013, pp.179-188
- 藤村和実・塚本伸一「幼児期・児童期のけんか経験が青年期の社会性に及ぼす影響—共感性、自己内省、社会的自己制御に注目して—」『日本教育心理学会第53回総会発表論文集』2011, p2-37
- 川喜田二郎『発想法—創造性開発のために』中公新書, 1967
- 木村優「協働学習授業における高校教師の感情経験と認知・行動・動機づけとの関連—グラウンデッド・セオリー・アプローチによる現象モデルの生成」『教育心理学研究 58』2010, pp.464-479
- Katie A McLaughlin, Margaret A Sheridan, Andrea L Gold, Andrea Duys, Hilary K Lambert, Matthew Peverill, Charlotte Heleniak, Tomer Shechner, Zuzanna Wojcieszak and Daniel S Pine「Maltreatment Exposure, Brain Structure, and Fear」『Neuropsychopharmac 41』2016, pp.1956-1964
- Martin H. Teicher, Jacqueline A. Samson, Carl M. Anderson and Kyoko Ohashi 「The effects of childhood maltreatment on brain structure, function and connectivity」『Nature Reviews Neuroscience, Volume17』2016, pp.652-666
- Michael D. De Bellis, Matcheri S. Keshavan, Duncan B. Clark, B.J. Casey, Jay N. Giedd, Amy M. Boring, Karin Frustaci, and Neal D. Ryan 「Developmental Traumatology Part II: Brain Development」『BIOL PSYCHIATRY 45』1999, pp.1271-1284
- 大河原美以「教育臨床の課題と脳科学研究の接点 (2) : 感情制御の発達と母子の愛着システム不全」『東京学芸大学紀要 総合教育科学系 62 (1)』2011, pp.215-229
- 戈木クレイグヒル滋子『グラウンデッド・セオリー・アプローチ・理論を生み出すまで』新曜社, 2006
- Tyler C. Hein and Christopher S. Monk 「Neural response to threat in children, adolescents, and adults after child maltreatment – a quantitative meta-analysis」『Journal of Child Psychology and Psychiatry 58:3』2017, pp.222-230

- 上原泉「乳幼児の記憶能力の発達—4歳前後のエピソード記憶と他の認知能力の発達の視点から—」
『日本心理学評論 Vol49, No2』2006, pp.272-286
- 山野さゆり・高平小百合「児童の学校ストレスとストレスへの対処行動について」『玉川大学教育学部紀要2013』2014, pp.115-131
- 吉川延代・今野義孝・会沢信彦「いじめの被害・加害体験と自尊感情との関係：大学生を対象にした
週及的調査研究」『人間科学研究 34』2013, pp.169-182
- 厚生労働省「虐待の定義（身体的虐待，性的虐待，ネグレクト，心理的虐待）」2009，厚生労働省
HP, https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/kodomo/kodomo_kosodate/dv/about.html（参照2023-02-13）.
- 厚生労働省「令和3年度の児童相談所による児童虐待相談対応件数（速報値）」2022-09-09, 厚生労働
省HP, <https://www.mhlw.go.jp/content/11900000/000987725.pdf>（参照2023-01-05）.

Negative Emotional Experiences Items from Early Childhood to Preadolescence

Maiko KAKUWA, Sayuri TAKAHIRA

Abstract

Negative emotional experiences, such as abuse, have been reported to have a significant impact on mental development from infancy. The purpose of this study was to extract specific items of negative emotional experiences that children experience in various human environments, such as home and school, before reaching adolescence. Semi-structured interviews were conducted with college students to ask them to recall their negative emotional experiences. To compensate for the ambiguity of their memories of early childhood, kindergarten teachers were interviewed to collect general negative emotional experiences found in early childhood. We then applied the KJ method and part of the M-GTA method to extract items of negative emotional experiences from infancy. The following negative emotional experiences were extracted from the family by adolescence : “My parents often quarreled and I felt bad,” etc. In terms of friendships, “I was bullied and had a hard time,” “I was unhappy because my goals and sense of values did not agree with my teacher,” “I made a mistake in a class activity and felt very embarrassed,” etc. I was very embarrassed by my failure in a class activity,” etc. were extracted. Negative emotional experiences in early childhood included “I felt bad because my mother (father) was very strict in discipline” and “I felt lonely because my mother (father) left me alone.

Keywords: negative emotional experiences, maltreatment, bullying, kindergarteners, college students